

ひとりの、物の生産の、終わるとき

群

青

おつと
うつつが追い立ててくる
黒鷓いろの屍衣にくるまれ
棺桶の空虚に押し込まれた
枯れた薔薇の棘が眠らせない
叫びすぎてふさがった喉の音
死んでいつた何人もの知り合いの呻き
全身から剥がれ落ちる皮膚の音
なぶられてしなる木々の泣き声
が止まない闇の湿気に
ゆらりゆられ
ぬるりなでられ
押さえこまれ
細胞が腐り
におう熱の溜をなしていく

逃げようとして
よろける
痩せこけた筋肉と骨とで
やつと這いずり出る
旺盛な季節の裾にすがりつく
重力の鉄槌を浴びても
やつと顔を上げて光に懇願する
せめてせめてせめて数個なりとも新しい細胞をくれ
と

肋が上下し鼻翼が痙攣する
力尽きて仰向けになつていと
そのうちにもう夜だ
禍々しい騒ぎをやめない夢
生ぬるくぬめぬめした平たいものの上に
寝かされる
揺すられる
においの溜に
何ども漬けられる
乾ききらぬ汗とも
毛の筆られた鶏の皮の匂いともつかぬ
口にくみ上げてくる内臓の匂いともつかぬ
死んだ細胞のにおいが

簀子に巻いてくる
ごろごろと崖を転がされ
底のない淵に落とされる

それはそうだが
毎日こんな思いをさせられ生かされていと
死に全てを支配されているわけではないし
どうなるうとも
どうせここまでできたのだから
けっしてやって来やしない母を泣いて呼ぶ子に
でもなつて
涙ぼろぼろ流して
大声をあげてみるか
それとも
足の指の間に空気を送り
体のあちこちの筋肉と皮とを掌に包み
歯のない歯茎に舌をこすりつけ
頭の皮を拳で押さえ
残り少なくなつた存在のすべてを
なでてやるか
したたかに女たちに撥ねつけられ
背筋真つ直ぐ立つているのも大変になつたが
臓腑には

まだまだ温もりがある
色の良い糞だつたし不消化の塊も触れなかつた
尿は何回も透明の薄い菊色をして流れ出すし
砂糖漬けの杏色のふぐりも時には張りを取り戻
している

それで
ま、そのうち
とどのつまりは、と
てれ笑いなのかふてくされなのか
目を上げる
崩れた鳥の卵のような月
若葉のおう夜だ
酒はあたりまえのように旨い
青い魚が海の匂いを残してするりと喉を滑る
震える手が髭を剃る
そしていまも
あなたをみつめる
あなたにこえをかける
あなたのむこうに
あなたのまちをみる

あなたはうつむく
あなたはなにもいわぬ
あなたのうなじに
あなたのかぜがうまれ

あなたのせをみる
あなたはあゆみさつて
あなたのかおりと
あなたのかげをのこす

あなたとはいったいだれ
あなたのむこうにいるのはだれ
あなたのからだをつきぬけて
みえるのはなに

波打つ海原
ゆるい風の渦巻く空

跳び上がる赤い花
誘われ呼ばれた

あなたがおしえてくれた土地
いのちのさかいが
みえる土地

あなたが拾ってくれるのを願ったのだったが

いつかあなたのすがたは消えて
灼けた土や草の原だけがのこった

あなたはたしかに招いていた
なのに

赤い湿った土地のひろがり
置き去りにされていた

途方にくれたが

立ち上がった

あなたのおもいでをたよりに

あなたへの思いにひつばられ

歩き続けた

あたりにはひとの気配があふれてきて

あなたへの思いが

むくむくとした毛におおわれた生き物になり

聞いたこともない新鮮な声をあげた

産声だった

かあさんかあさん　こわいよこごえるよ

隧道を出るとつぜんくだけちる　明け方の噴

水

胸椎のじゅういちばんから　湧き水が湧く

つまのほねとぼくのほねが 菜殻火に焼かれ
鐘ひとつ鳴る ひとからうまれ 行き着くのは
どこだ
つなかりをしらないまんま じょうどなんぞへ
はいけません 給料日だし
地蔵にはあえず裸足の 化野 ゆめに弾きださ
れ醒めては 靴がやぶれ
それぞれにいのちは 多忙だが やわらかい綿
毛でつつまれている
愛を得るなんてめっそうもない わっはは 洗
濯場は子宮だらけ 子をそだててはい
やすやすと資本家に使われ
子たちを広場に連れ出す 地平線が見える
手をつなぐ

さすればまいりましょう 御同輩
総罷業の いちだいじへと
海風のつて ざわざわとこえのする
坂のうえの せいさんするものたちの高みへと
すべての決着の場所へと
まいりましょう